

序文

鍼灸は我が国を源流としており、はるか昔からその流れが絶えることはない。岐黄を源流とするこの鍼灸という技術は、長い時間を経て、現在に至りあたかも生い茂った草木のように充実している。このような中医鍼灸を振興させる絶好の機会において、われわれは鍼灸の特徴をより多くの人に知ってもらい、鍼灸の技術が枯れ木が春を迎え枝葉を生い茂らせるかのように豊かなものとなり、鍼灸の活力がさらなる精彩を放って世界に広まるように努める必要がある。この数十年来、鍼灸はその臨床治療・文献整理・作用機序の研究などにおいて大きな進展を得ている。これらが鍼灸技術の発展に有益であり、鍼灸の世界的な普及を促進するうえで必要なものであることに疑いの余地はない。しかし、われわれは鍼灸の理論研究と弁証論治体系がいまだ不完全なものであるということに目を向ける必要がある。どのような学問であっても必ず独自の理論体系が備わっている。そして経脈病候とその論治体系は鍼灸の核心ともいえる重要な内容である。『内経』や『難経』に経脈病候に関する記載はあるが、残念ながら単なる画竜点睛に過ぎず、系統立った経脈病候の全体像を表現するまでには至っていない。さらに、その経脈病候の弁証に関する内容に至っては「鳳毛麟角」と言わざるを得ない〔画竜点睛・鳳毛麟角ともに、全体を輝かせる素晴らしい内容であるが、あくまで全体のごく一部分に過ぎないということの比喻として用いられている〕。これは鍼灸に数千年もの発展の歴史があることとはまったく似つかわしくなく、大きな空白の領域が存在するということを意味する。弁証とは臨床治療における魂ともいえる内容であり、治療の際に最良の選択を行う根拠となるものであり、最高の治療効果を得るための基礎となるものである。経脈弁証の弁証論治をより完全なものとして完成させるために、

北京中医薬大学の博士課程指導教官でもある張吉教授は十余年にわたる
艱難辛苦を乗り越えて、ついに本書を書き上げるに至った。鍼灸弁証論
治の空白部分の補填を成し遂げたことは、数千年にわたる鍼灸の歴史に
おいても注目されるべきことだといえるかもしれない。このたび本書へ
の論評の機会をいただいたことを非常に栄誉なことと感じ、序文を書か
せていただいた次第である

元中国鍼灸学会副会長 賀 普仁